

## 試論

「寛文二年（一六六二）二童子付き庚申塔」は

「二猿付き庚申塔」である可能性が高い

秦野 秀明

はじめに

旧・武蔵国埼玉郡別府村（現・越谷市東町）金剛寺<sup>(1)</sup>の参道脇にある「寛文二年（一六六二）二童子付き庚申塔」は、昭和四十四年発行の『越谷市金石資料集』<sup>(2)</sup>、平成二十七年二月発行の『大相模地区 旧南百・四条・千足村石仏 平成二十七年二月改訂』（以下『石仏』と記載）<sup>(3)</sup>の両資料において「二童子付き」の庚申塔として説明されている。

また、『石仏』<sup>(3)</sup>では以下のような説明も記載されている。

「二童子が刻まれているのはとても珍しい。

青面金剛の姿は「陀羅尼集経」で説かれているが、その中で青面金剛の両脇には童子が一人ずついるとされている。

この「陀羅尼集経」に影響されて二童子が描かれたのであろう」

『石仏』<sup>(3)</sup>で紹介されている「青面金剛」の「儀軌」で

ある「陀羅尼集経」の出典を正確に示せば、「大青面金剛呪法」『仏説陀羅尼集経・巻第九・金剛部下』<sup>(4)</sup>であり、「二童子」に関する部分は以下のように記載されている。

「其像左右兩邊各當作一青衣童子髮髻兩角手執香鑪」

以上の前提で、「寛文二年（一六六二）二童子付き庚申塔」を考察した上で、果たして「二童子」として説明されてきた彫像主体が妥当であるか否かの検証を試みる。

写真 1 A

写真 1 B



## 「二童子」

「儀軌」で規定された「二童子」は前記のように、

- ①衣服は「青い衣」を着る
  - ②髪型は「両角（総角（あげまき）？）」で「髻（みずら）」
  - ③手には「香鑪（香炉）」を執る
- である。

江戸時代前期の寛文年間（一六六一〜七二）には存在していた「四天王寺のお札」、「金輪院の掛軸」、「大津絵」などで描かれる「二童子」は、管見の限り「儀軌」の規定に忠実である。

大畠 洋一氏の「青面金剛進化論 通説」<sup>(5)</sup>によれば、これらの「四天王寺のお札」、「金輪院の掛軸」、「大津絵」などで描かれる「青面金剛」や「二童子」などをモデルとして、寛文元年（一六六一）から寛文四年（一六六四）にかけて、江戸近郊に「4基」の「青面金剛像庚申塔」が造立されたと推定されている。

その「4基」で表現された「二童子」の姿は、石仏としての制約がある①の「青い衣」の「青色」以外、①②③の全てが、「儀軌」の規定に忠実である。

以上のような寛文年間（一六六一〜七二）における江戸近

郊の様相を基に、「寛文二年（一六六二）二童子付き庚申塔」の「二童子」を改めて観察すると、

- ①衣服を着ているようには見えない
- ②髪型に相当する表現には見えない
- ③手には「香鑪（香炉）」を執るようには見えない

造形であり、下腹の出た体型は「童子」には見え、  
「儀軌」では「二童子」の「姿勢」は規定されていないが、管見の限り「立ち姿」でない「胡坐をかいた」姿勢は、この「寛文二年（一六六二）二童子付き庚申塔」以外に存在しないと推定される。

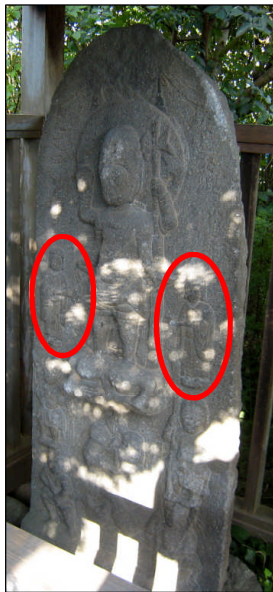


写真 3 A

写真 3 B



写真 2 A

写真 2 B



## 「二猿」

松村 雄介氏の定義<sup>(6)</sup>による「大曲型青面金剛像庚申塔」7基は、承応二年（一六五三）から明暦四年（一六五八）（1基の造立時期は不明）にかけて造立され、その全てが「二猿」付きである。

この「大曲型青面金剛像庚申塔」に見られるように、寛文年間（一六六一〜七二）前後の関東における「庚申塔」においては、表現される「猿」の数は後の時期の標準となる「三猿」だけではなく、「二猿」の場合もあつたことが判る。



写真 4 A

写真 5 A



写真 4 B

写真 5 B



## 結びにかえて

寛文年間（一六六一〜七二）及びそれ以前の江戸近郊を含む関東における「庚申塔」の状況を鑑み、加えて「儀軌」で規定された「二童子」を基に考察した結果、「寛文二年（一六六二）二童子付き庚申塔」で表現される彫像主体は、「二童子」ではなく「二猿」であると解釈することが、最も妥当であると推定した。

つまり、「寛文二年（一六六二）二童子付き庚申塔」ではなく、「寛文二年（一六六二）二猿付き庚申塔」である可能性が高いと推定した。

尚、石造物の「正面」上部には梵字の「バク」が刻まれており、主尊が「釈迦如来」の庚申塔でもある。

## 注

- (1) 真言宗豊山派・稻荷山金剛寺  
埼玉県越谷市東町3丁目354
- (2) 越谷市史編さん室編（一九六九）『越谷市金石資料集』  
越谷市史編さん室
- (3) 加藤 幸一（二〇一五）

『大相模地区 旧南百・四条・千疋村石仏  
平成二十七年二月改訂』（越谷市立図書館蔵）

「正面」

寛文二寅年

(童子)

□左エ門  
三左エ門  
專右エ門

施主 □兵衛

(梵字バク) 奉供養庚申二世安楽所願成就所

敬白 仁□□  
佐右門

十月十五日

(童子)

□八右門  
兵三良  
三良衛門

小右門

▲梵字バク



(4) 「大青面金剛呪法」『陀羅尼集経・第九』

「SAT大正新脩大藏経テキストデータベース」

2018版 (SAT 2018)」

<https://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT2018/>

[master30.php](https://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT2018/master30.php)

(5) 大島 洋一 「青面金剛進化論 通説」

<http://home.catv-yokohama.ne.jp/66/tok53/>

[sekibutu/SekiRon2010/syoumen/syoumen01.htm](http://home.catv-yokohama.ne.jp/66/tok53/sekibutu/SekiRon2010/syoumen/syoumen01.htm)

(6) 石川 博司 (一九八五) 『石仏研究ハンドブック』

雄山閣出版 pp.142-145

### 添付写真

写真1 A (移転前)

「寛文二年(一六六二)二童子付き庚申塔」

撮影 (二〇〇八年六月二十八日)

写真1 B (移転後)

「寛文二年(一六六二)二童子付き庚申塔」

撮影 (二〇二一年四月七日)

写真2 A・写真2 B

埼玉県所沢市東町「庚申堂」

「寛文三年(一六六三)青面金剛像庚申塔」(二童子付き)

撮影 (二〇二一年十月二日)

(一猿付き)

写真3 A・写真3 B

埼玉県さいたま市南区広ヶ谷戸

「寛文四年(一六六四)青面金剛像庚申塔」(二童子付き)

撮影 (二〇二一年十月四日)

(二猿付き)

写真4 A・写真4 B

神奈川県茅ヶ崎市行谷「金山神社」

「承応四年(一六五五)青面金剛像庚申塔」(二猿付き)

撮影 (二〇一九四年三月二十四日)

写真5 A・写真5 B

神奈川県茅ヶ崎市十間坂「神明宮」

「明暦四年(一六五八)青面金剛像庚申塔」(二猿付き)

撮影 (二〇一四年二月十二日)



▲埼玉県越谷市東町「金剛院」  
「寛文二年（1662）二童子付き庚申塔」  
※「二童子」ではなく、「**二猿**」付きの可能性が高い  
撮影：2021年4月7日

▼奈良県大和郡山市小泉町「金輪院」  
「掛軸」における「**二童子**」  
※ご住職のご厚意により特別のご許可を得て撮影  
撮影：2014年5月3日

